

II 土地利用現況

本地域は、5万分の1地形図の「水口」「上野」「名張」図幅に該当する範囲である。行政的には、上野市、名張市、阿山郡島ヶ原村・阿山町、名賀郡青山町の全域または大半部と、阿山郡伊賀町・大山田村と一志郡美杉村の一部が含まれる。三重県の西部に位置する本地域は通称「伊賀地方」と呼ばれ、滋賀県・京都府・奈良県と接している。

本図幅の東部ならびに南部は、布引山地と高見山地に連なる山岳地帯であり、その他も丘陵地が多くを占めている。全体的に東高西低の地形であり、地域内を流れる木津川とその支流の名張川・拓殖川などは大阪湾に注いでいる。

地域内の交通をみると、まずJR西日本の関西本線が本図幅の北部を東西に横断している。さらに重要な交通の動脈は、南部の名張市街地などを通っている近鉄大阪線である。この近鉄大阪線の伊賀神戸駅より分岐して北上し、上野市街地を通してJR関西本線と接続しているのが近鉄伊賀線である。次に道路交通をみると、本図幅を北東から南西へと横断している自動車専用道路の名阪国道(国道25号線)が重要である。この道路は、その東端と西端でそれぞれ東名阪自動車道と西名阪自動車道に接続し、名古屋と大阪を結んでいる。この地域内にも数多くのインターチェンジがある。その他の国道としては、上野市から京都府方面へ通じる163号線、名張市を通過して東西に走る165号線、地域内を南北に走っている368号線、422号線がある。

以下では、本地域の主要部を構成している上野市、名張市、阿山郡伊賀町・島ヶ原村・阿山町・大山田村、名賀郡青山町の7市町村(伊賀地方)を対象として、土地利用の現況を概観する。まず表で明らかのように、この地域では、総面積に占める宅地の割合は約5%である。その割合が比較的大きく、かつ宅地の絶対面積も大きいのが、上野・名張両市である。上野市は城下町としての古い歴史を有し、伊賀地方の中心都市として発展してきた。市街地内には商業・業務地区の発展がみられる。一方名張市は、上野市に比べて都市機能の集積では劣るものの、市街地近郊の丘陵地における住宅地開発が著しい。これは、大阪都市圏のベッドタウンとして位置づけられ、大規模な宅地造成が進められ

てきたためである。こうした新しい宅地開発は、伊賀町や青山町にもみられる。その他の小集落は、盆地内部や小河川が刻んだ谷沿いに分布している例が多い。

次に農業的土地利用についてみる。耕地の比率は全体的にあまり高くない。その中で相対的に比率が高いのが上野市、伊賀町、阿山町である。耕地の中では田が占める割合が非常に大きく、他の特色としては、上野市で畑の面積が比較的大きいという程度である。なおこの地域の農業では畜産が盛んであるが、それは土地利用にはあまり反映されていない。

次に当地域全体では、森林が総面積の約6割を占めている。特にその比率が高いのが大山田村と青山町である。最低の上野市でも総面積の約半分は森林である。樹林地面積（人工林面積+天然林面積）に対する人工林面積の比率、すなわち人工林率を計算すると、全体で56.4%である。青山町が85.9%、大山田村が76.6%と特に高く、逆に人工林率が低いのは、上野市と阿山町である。前2者および名張市ではスギ・ヒノキの人工林が多いが、他の地域では主にアカマツの人工林が広がっている。さらに天然林の中でもアカマツの二次林が多いため、この地域内の森林の林相をみると、全体的に針葉樹が卓越している。

その他の土地利用の状況を検討すると、名阪国道に沿って工業地区が点在している。これは、名古屋および大阪へのアクセスの良さを示すものである。さらに名張市の市街地近郊においても新しい工業団地の発展がみられる。本図幅内にみられる空地、改変中の土地の多さは、この地域における開発の活発さを物語っている。特に、上野市市街地南東の丘陵地には、地域振興整備公団による大規模な「新都市」が建設されている。

また観光レクリエーション的利用については、ゴルフ場の多さが注目される。これも前述した交通の便利さと関連しており、本地域内には計12のゴルフ場がすでに建設されている。なお、この地域の南部、名張市・青山町・美杉村の一部は、室生赤目青山国定公園に指定されている。

参考文献

- 環境庁(1985)：第3回自然環境保全基礎調査(植生調査)・現存植生図「三重
県20・水口」「三重県21・上野」「三重県22・名張」
三重県(1979)：『第2回自然環境保全基礎調査・植生調査報告書』

(安食和宏)

表Ⅳ土地利用現況

市町村	宅地 (1994年)	耕 地 (1993年)				森 林 (1990年)				総面積 (1993年)
		計	田	畑	樹園地	計	人工林	天然林	他	
上野市	1,325 (6.8)	4,450 (22.8)	3,460 (17.7)	992 (5.1)	186 (1.0)	9,531 (48.8)	2,205 (11.3)	7,137 (36.6)	189 (1.0)	19,526 (100)
名張市	1,119 (8.6)	1,350 (10.4)	1,110 (8.6)	237 (1.8)	76 (0.6)	7,296 (56.2)	4,585 (35.5)	2,446 (18.9)	265 (2.0)	12,976 (100)
伊賀町	335 (5.4)	1,170 (18.9)	1,090 (17.6)	77 (1.2)	12 (0.2)	3,344 (53.9)	1,815 (29.3)	1,439 (23.2)	90 (1.5)	6,201 (100)
島ヶ原村	57 (2.5)	232 (10.1)	183 (8.0)	49 (2.1)	1 (0.0)	1,460 (63.6)	572 (24.9)	859 (37.4)	29 (1.3)	2,295 (100)
阿山町	175 (2.4)	1,120 (15.3)	1,050 (14.4)	70 (1.0)	19 (0.3)	4,235 (58.0)	937 (12.8)	3,169 (43.4)	129 (1.8)	7,297 (100)
大山田村	144 (1.5)	901 (9.4)	824 (8.6)	77 (0.8)	7 (0.1)	7,806 (81.3)	5,885 (61.3)	1,793 (18.7)	128 (1.3)	9,598 (100)
青山町	162 (1.5)	545 (5.0)	495 (4.5)	50 (0.5)	17 (0.2)	8,751 (80.3)	7,339 (67.3)	1,201 (11.0)	211 (1.9)	10,900 (100)
計	3,317 (4.8)	9,768 (14.2)	8,212 (11.9)	1,552 (2.3)	318 (0.5)	42,423 (61.7)	23,338 (33.9)	18,044 (26.2)	1,041 (1.5)	68,793 (100)

単位はha、()は構成比(%)、樹園地は畑の内数

資料：『三重県市町村要覧(平成6年度版)』『第41次三重農林水産統計年報』

III 水系・谷密度

縮尺5万分の1地形図「水口」・「上野」・「名張」の3図幅に含まれる地域を流下する主な水系には、一級河川木津川とその支流があげられる。阿山郡島ヶ原村では、1956(昭和31)年より木津川の流量観測が実施されている(流域面積:512.0km²)。「第50回流量年表(平成9年)」に基づき木津川の流況をそれぞれ比流量(m³/sec・100km²)で示せば、最大489.62、豊水2.92、平水1.75、低水1.20、渇水0.71、最小0.05、年平均3.41である(建設省河川局、1999)。木津川の主要な支流には柘植川・服部川・名張川等の河川群があり、久米川・宇陀川では生活排水が水質汚濁の大きな要因となっている。下柘植川では、地域によるソフト面の浄化対策が積極的に図られている点も特徴である(森、1993)。流域における都市化の進展が著しい名張川では、年流出率、およびひと雨に伴う流出率の平均値が上昇傾向にあることが指摘されている(森、1988)。

水系は主要な流路と開析された地形の現状を平面上に示したものであり、水系図作成の基図となる地形図の縮尺が異なると、同一地域であっても完成された水系網には粗密の違いが生ずる(たとえば高山、1986)。土地分類基本調査の基図となっている縮尺5万分の1地形図では、流路の幅が1.5m以上ある部分に限って水線が表現されており、それ以下の流路幅の部分については河川として表わされていない。したがって水系図の作成にあたっては、地形図の等高線の配列状態から判読することのできる地表の凹部について、等高線の曲がりか上流まで追跡できる最大限の部分まで水線を延長し谷として判読する必要があり、さらに作業の過程では縮尺2万5千分の1地形図を利用して補完した。また平坦部の主要な水路についても谷とみなして表現した。水系の発達には地質構造の方向性や浸食作用の大きさの相違と密接に関連し、これらの要因に支配され、流路と谷の平面的な分布の状態には地域差が生じる。本図幅では、山地を中心とした地域において支谷の発達をともなった谷密度の大きな水系網が形成されており、ほとんどの地域では樹枝状型を示す点の特徴である。

谷密度は単位面積あたりの谷の数を表わしたものであり、水流頻度と同義である。表・には本図幅における谷密度の計測結果が、縮尺5万分の1地形図の1

図幅を縦横それぞれ20等分して得られる面積約1km²の方眼における谷の本数として示されている。谷密度の数値は、作成された別添の水系図をもとに、縮尺5万分の1地形図の1図幅を縦横それぞれ40等分した方眼の4辺を切る谷の数の和を、隣接する4個の方眼(面積約1km²)ごとに集計することにより求めることができる。なお、谷と方眼の辺とが重なっている場合には一つの谷として数えた。本図幅に含まれる地域内には、河谷や海岸の低地部を除くほとんどの範囲にわたって30以上の数値が分布する。谷密度図は河川の浸食による地形の開析の程度を定量的に表現しており、その分布は地形の発達段階、構成岩石、水流次数の他、起伏量・傾斜・水系密度(単位面積あたりの流路長の総計)などの差異に制約される(国土調査研究会〔1986〕;町田ほか〔1981〕)。

参考文献

- 国土調査研究会〔編〕(1986):「国土調査用語辞典」、地球社
高山茂美(1986):「川の博物誌—理科年表読本—」、丸善
町田 貞ほか〔編〕(1981):「地形学辞典」、二宮書店
森 和紀(1988):名張川における流出率の経年変化傾向、日本水文科学会1988年度学術大会講演要旨集
森 和紀(1993):「下柘植川の水文環境」、伊賀町水道課

(森 和紀)

平成9年3月 印刷発行

土地分類基本調査（平成7年度調査）

「上野」・「水口」・「名張」

編集発行 三重県企画振興部政策調整課

津市広明町13番地

電話 (059)224-2785

印刷 中央地図株式会社

東京都板橋区舟渡3丁目15番22号

電話 (03)3967-1781